
俺の彼女はツンデレです

あずまひとみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の彼女はツンデレです

【Zコード】

Z8748G

【作者名】

あずまひとみ

【あらすじ】

今日も俺は仕事を定時で終わらせて、さっさと帰宅する。なんであつて　そんなの彼女のために決まってるだろ。ああ、花さんが俺を待つていてる！

1 彼女と変態（前書き）

また貴方ですか、な方もどうも初めまして、な方もここまでたどり着いていただきありがとうございます！さあ一来たからには一読を！そんなに長くない中編小説になる予定デス、

1 彼女と変態

俺の彼女は、ツンデレです。

一秒でも早くアパートへ帰るために、今日も俺は定時で仕事を終わらせた。

彼女に、会いたくて仕方ない。

早々に鞄に物を詰める俺に気づいて、デスクが隣の同僚、横川が声をかけてきた。

「向坂、おまえ今日もすぐ帰んの？」

「ああ

「ちよっといらっしゃいませ」

「無理。仕事が残るのはおまえ自身の責任だろ。俺が手伝ついわれはない」

簡潔に言い放つ。

「つたぐ、相変わらずドライだなー。なんでこんな奴がモテるんだ?
?世の中間違つてるよ」

余計なお世話だ。

「分かつてないですねぇ、横川センパイ。向坂センパイは、そこが
セールスポイントなんですよ~」

分からなくていいし、セールスポイントにしたつもりもないんだが
な?東海林。

俺はめんどくさいな、早く帰してくれと思いながら、向かいのデスク
からいきなり会話に入ってきた一いつ下の後輩に視線をやつた。

「やん、向坂センパイに見つめられちやつた。今日一緒に飲みに行
きません?」

見つめてないし行くわけがない。

無言で流すと、帰宅を告げるべく上司のもとへ向かう。

まとわりつく視線など無視だ、無視。

「くう~、あのクールさたまんないわっ。めっちゃ冷たい目で見ら
れちやつた」

「女子って理解できねーよ……」

東海林のアホな声と、憔悴したような横川の声が背後から聞こえる。

横川。女心なんて一生理解できないと思つぞ。

ていつかしようと思つだけ無駄だ。

「終わりました。上がつてよろしくどうか」

書類とにらめっこしていた上司に一言かけて、俺はそのまま許可を取つた。

「…おー、いいぞ。どうせおまえに言つ」とはない。明日には私が部下になつてゐるんぢやないか、つて毎晩心配してゐるくらいだからな」

「大袈裟です」

「だといいがな。」苦労さん

「お疲れさまでした」

一通りの会話を終えて、俺は一礼したあと出入口に向かう。

出口にたどり着くまでに5人の女性に声をかけられたが全てスルー。いつもことだし、それに今はそれどころぢやない。

俺は、とにかく早くアパートに帰りたい。だって、待つてくれてる人がいるんだから。

よつやく家に着いて、俺はガチャガチャと鍵を開ける。

きっと彼女はこいつのよつよ、鍵の音を聞きつけすぐそこで待つてころだらう。

はやる気持ちを押さえて、ドアノブを回す。

押して開けた、その瞬間。

「花やーん！ーーーー！」

「ユヤーーーー！」

俺が勢いよく抱きしめたのは、俺の彼女。体長約一十センチ、雑種のメス。名前は花さん。

紛うじことなき、猫だ。そして、彼女だ！

ああ、つるつるでさうらうの毛並みと、長くつねる尻尾が今口も運らじこ……。

喉を撫でてやるひと手を伸ばすと、花さんは抱き上げた俺の手から いつも簡単にするとつと抜け出し、フローリングの床にすたつと降り立つ。

くつ… 今日も撫でさせてもらえなかつた。この、シンデレラさんこ め。

猫つてどうしてこの自由奔放なんだ？

あー、可愛を余つて憎を咲。

くわづ、と思いながらも俺は履きっぱなしだった靴を脱いで揃えて、続いて部屋着に着替える。

その後すぐにお所に向かつて、作るものは晩ご飯だ。

皿麺じやないが、俺は三食自炊だった。

弁当だつて持参する。

光熱費やらなにやらかかる中、悠長に外食とか惣菜とか食つてられるわけがないのだ。

料理していると、花さんが遠くからすました顔して立つていて、俺を蔑むような目で見ている。（俺の勝手な解釈）

猫特有のあのすりつとした立ち姿つて、妙に田たへのは俺だけか？

野菜炒めと焼き魚といつヘルシーなメニューを作り終えて、俺は食卓についた。

花さんはこれを見計らつて、家具の下をそろそろそろとかいぐぐり足元に近づいてくるのが定石だ。

本人は真剣に気づかれていなければいいらしいので、俺は気づかないふりをしてあげるという優しさを發揮している。

床に落としたふりをして、焼き魚をあげた。脂がのった、なにげに一番おいしかったんだ。

ボトッと音がした瞬間、花さんの本領は發揮され
1秒で繰り出される猫パンチは、それとともに爪も駆使して田の前の獲物を、綺麗に確実にかつさりつけていった。

「うーん、花さん今日も見事」

ひとりパチパチと称賛の拍手を送る。

しばらくして、飯を食べ終え、食器を流しに持つていつた俺は、ウズウズしながら後ろを振り返る。

レッツキンシップターイム!!

部屋のど真ん中、というなんともふてぶてしい定位置に座つていらっしゃる花さんに向かって、ダイブ。

「花さんへん」

猫なで声を猫に向かって出す俺つて相当な猫マード。いや、花さんマニアだな!

「シャーッ!!」

…威嚇。間髪入れず威嚇。威嚇の嵐だ。

そう。花さんは、同棲し始めてもう一ヶ月は経とうかといつての、俺から近づくと必ずこうして威嚇をする。

悲しそうだと思つ。

俺の帰りを玄関で待つてくれているのは、全部自分のため、ひいては餌のためだつて、いつのまは分かつてゐる。

だがしかし 分かっていても、俺は彼女の魅力に勝てないのだ。

だつて可愛いんだもん！高級な缶詰めやキヤットフードの貰きものやめる氣なんて、わらそら起きなさい。

すべては愛ゆえだ…。

「花さんつ」

「シャーリ」

「ははは、ははは。おみえ。それ」

俺は花さんと田線が同じになるように床に寝転ぶと、瞬時に抱き上げて天に向かつて高い高いをする。

「嫌そうな顔だなあ。でも俺は知つてゐるんだぞー？おまえはな一旦言葉を区切つて起き上がると、俺はあぐらをかいてその中心、足の真ん中に彼女を置いた。

そして、喉を撫でる。

「これに弱いだろー！大好きなんだー！喉、口、口をじて、ツンからデレに変わつてますよー！今さら『付いて』しまつたほどされた『みたいな顔するのも可愛がり』

エンジン全開、花さんの魅力を語りだしたら止まらない！

聞く相手もいないのに、お構いなしに俺はまだまだ話を続ける。

しかしそれは唐突に、そして。

「また一人で喋ってるよこの人。変人。きもい。いい加減花さん離れ、したらどーなの？」

……いつも通りに遮られた。

背後からかかるのは聞きなれた声。

俺の至福の一時を邪魔しておいて、拳句の果てには変人、きもい呼ばわりする女。

振り返つて勝手にドアを開けて侵入してきた人物を見やれば、案の定それは幼なじみにして同じ会社の受付嬢、叶空かのうそらだった。

「空。そんなこと言つてるけどな、おまえだつて花さんに夢中なくせに」

「そうだけどね。だつて、花さんは可愛いよ？ただ、海が変人だつて言つてんの」

「…………」

「あーあー、皆びっくりだよなあ。営業部のクールガイ、顔よし頭よし性格よしの向坂海が、まさか自宅では猫ヲタクの独り言野郎だなんて。抱かれたい男ナンバーワンの座からも一気に転落だね」

…あ？

「ちょっと待て。なんだ今。聞き捨てならん単語があつたよな？」

「ん？ 社内ランキングのこと？ 聞きたいならまだ他にもあるけど。付き合いたい男ナンバーワンテショ、それからワインが似合つ男ナンバーワン、あと…縛られてもいい男ナンバーワン」

や、最後のなんだ？…怖くて聞けねえ。

「でも、本当の海を知つたら皆どん引き間違いなしーこれは確定事項だね？」

笑つて言いながら、空は靴を脱いで部屋にあがつた。

「…ハイハイそうだな」

すぐ背後に空が腰を下ろす。これもいつものこと。

「花さん、おいで。そーそー、良い子」

…そして。悠々と俺の横を通り過ぎて、空は机に向かへ行つてしまつのもいつものことだ。

…負けない。

しんみりしていると、携帯が鳴つた。

「げつ…」の着信、実家だ

「…あはは、でなよ。またあの話でしょ」

空の声がワントーン下がる。

それに気付かながらも、俺はとうとう電話を取るのだった。

1 彼女と変態（後書き）

2 下された最終通告（前書き）

スミマセン急用が入ってしまったので、お詫び申し訳ありませんでした
（ノ_ゝ）。遅ればせながら2話目をじき堪能いただければ幸い
です。

2 下された最終通告

「…もしもし」

『海?』

「海でーす…」

『なに気の抜けた声出してんの。あんた、そろそろ約束の二ヶ月よ？相手は見つかったの』

そりきた。やつぱりこの話だ。

「まだだけど」

『まあまあまあ…ビーセまた花さんにかまつので忙しいとか言うんでしょー？あんたねえ、知ってる？一人暮らしでペット飼うのは結婚遅れる一つの大きな要因なのよー？』

「花さんはペットじゃねーよ！俺の彼女だ…！」

うわ、いま絶対後ろの空がブリザードのような冷たい目で俺のこと見てるよ。

『まだそんなこと言つてるの…？一十六にもなつて人間の彼女一人もいないなんて！前に、あと三ヶ月だけって言つたのはあんただからね。約束破つたら承知しないよ。いつになつたら孫の顔が見れるのやひ…嫁き送れもいいとこだよ、まったく』

「まだ二十もえだーそれに俺は女じゃねえ、嫁き送れって失礼だろ

『本当のことじでしょ。アハハ、アハハ、アハハんにあんまり迷惑かけるだじやなこよ』

「…かけてねえよ」

『あんたの言ひことは信じられないからねえ。お嫁さん探しにだつて真面目にしてるんだか』

母親が、電話の向いついでふうっとため息をついたのが分かった。

相変わらずマシンガントークだな。しかも声でかいし。…早く電話切つてくれないかな。

『まあ、いーわ。約束の一週間後。もう一回、電話かけるからね。その時にまだ相手が見つかってなによつだつたら…』

「だつたら？」

『実家強制連行、即お見合いでからね』

はあー?ちょっと待てよ。…やつ反論の声をあげるまえに、電話はブツツと切れた。

無機質なブーッ、ブーッ、ブーッといつ音だけが、繰り返し受話器から耳に届く。

どこまで横暴なんだうちの雅子はーー父さんよくあれと結婚する気になつたな…。尊敬だよ。たかシリスペクトだ。

憔悴しきつた感ばかりで、花さんと戯れている間に振り返った。

俺が見てこる」と云ふと、空はふと真顔になつて花さんから視線を俺によじや。

肩に触れるか触れないかくらいの長さの髪が、せりつと揺れた。

何とはなしに、この髪の長さ、好きだなあと思つ。

首筋が見えるか見えないかつていうきつぱつの境界線に、燃える。噛みつきたくなる。

いや、個人的見解なんだけどせ?

「海? なにボーッとしてんの。電話そんなに疲れた?」

「あ? あまあ… それもあるかな」

大半はおまえの首見てたなんて、言えたもんじやない。

「だーセ」「変態……」つてほつたおそれるに決まつてゐる。

「お母さんはなんて?」

「ああ……こつもどおり。早く結婚しろって、ただそれだけ」

「…………」

「空?」

いきなり黙つてどうしたんだろ？

俺は空の隣に腰を降ろして、彼女をのぞき見た。

「空ー」

「うぬうさい。そんなことより海、今からでも早く嫁見つけたら。
お母さん可哀想じやん。孫の顔見せてあげなよ？」

最初のうぬうさい、は剣呑な声と表情で。

後半は、意地くそ悪い感じのこやつとした笑顔で。

空は、やつ言つた。

「だよなあ。実家強制連行なんて避けてえし

「えー？」

空が驚いたように声をあげて、はじかれたように顔をいりからに向けた。

ああそつか、俺が電話で聞いただけで空には言つてなかつたんだつけ。

「約束の期限までに結婚相手見つけなかつたら、実家強制連行即お見合い、だとよ」

約十秒くらいだらうか。

空はあんぐりと口を開けたまま固まっていた。

「…『写メ』とかやよかった。」

「じゃ、じゃあ花さんばーさんの」

「おまえに預かる」

「仕事は？」

「有休残ってるからそれ使つ、かな？」

「なんでそんな焦つてないのー!?」

空が少しだけ声を荒げた。…珍しい。

「なんでつて…」

言葉を切つて、俺はじっと空を見つめた。

数秒間、沈黙が続く。

「…なによ

「焦らない理由があるから。…それだけだ

「焦らない理由?…なにそれ

「おまえには教えねえ」

「 あつせつ」

途端、目が据わった空は、膝から優しく花さざを降ろし、立ち上がりつて玄関へと足を向けた。

「帰んのか？」

「うそ」

ドアノブを回して、俺に背を向ける。

「メシは」

「いつも食べっこひくせー。」

「自分で作るー！」

バタンー

そう言いつ捨てて、空は姿を消した。

あの野郎、近所からクレームつぐだらうが！

「…料理、下手なべせ」「元は

びつかぬ飯だよ。

誰に向けるでもなく、俺はまつと呟いた。

「 なあ 花さん？」

あたりまえだけど、花さんが答えることはなかつた。

2 下された最終通告（後書き）

次回は必ずや木曜日に！

3 空模様

「あー空、おはよつ」

「…杉浦先輩。おはよひびきまーす」

「なんか不機嫌?顔怖いんだナビ?」

「…そんなことないですよ」

不機嫌?

私は胸中で呟くと、ぶすっとした顔のまま受付のカウンターに座つた。

…そう、今日の私は不機嫌だ。

料理のできない私が、いつもの様に幼なじみの海の部屋を訪ねたのが、昨日の夜。そこでの一通の電話が発端だった。

海の実家からの、結婚を催促する電話。それはまあ、いつものことだし、おばさんの早く息子に落ち着いてほしい、孫の顔を見たいって気持ちもよく分かるから、仕方のないことだとは思う。

だけど、私が不機嫌になつてゐる理由はそこじゃない。その後の、海の言ったことに対する腹を立てているのだ。

今までの電話で散々結婚話をばぐらかしてきた海は、あと一週間という期限つきで、実家強制連行を命ぜられていた。

普通、やつこいつもって焦るものじゃん。なのに、あいつ。

なんでそんな焦つてないの！？

焦らない理由があるから。…それだけだ

焦らない理由？…なにそれ

おまえには教えねえ

『おまえには教えねえ』だあ！？ああそ、だつたらもう知りませんーお見合いでもなんでも勝手にして、好きでもなんでもない人と結婚しちゃえば！？へそつ、じつちの気を知りもしないで。

…素直に『行かないで。お見合いなんかしてほしくない』と言えたらいのだらうけど、いかんせん私たちの関係上、そんな女子めいたことは口が裂けても言えない。

だつて、あたしは知つてる。海が女人にいくら言って寄られても相手にしないのは、そのあの恋愛の「コタコタ」が面倒くさいからだつて。

なのにビーフしてあたしが言える？小さい頃から変わらない距離感、友達同士のよつなさばさばした関係をあいつは望んでるんだから。

そしてそれを実行してるからこそ、私は今でも、昔から変わりず海の一一番そばにいてられるんだから。

…まあ最近はもっぱら花さんことられてるけど。

だから、実家に戻つてほしくないといつ私の本音の代わりに、悪いとは思いながら花さんをダシに海を引き止める作戦に出たの。花さんはどーすんの?と聞いた私に、海はあつやつと「おまえに預ける」と言つてのけたのだ。

ふーん…私現地妻?家政婦?居残り?あなたの留守番?

…ふつやけんじやねえ!私をなめるのもたいがいにしりー。

とまあこんな感じで昨夜不満が大爆発し、今に至るわけなのだった。

「見て空。キング」出社

昨日のこと思い出してもうライライし始めた私を現実の世界に呼び戻したのは、軽い杉浦先輩の声だった。

顎でしゃくられた玄関ホールの方を見やれば、どうやら私の不機嫌の原因、海が出社してきたらしい。

「おーおー。まーた女性社員の田、釘付けにしちゃつてえ。ほんと、オーラあるつていうかなんていうか」

ねえ?と話を振られれば、私も答えるしかない。不機嫌な聲音のまま、「…そうですね」と、当たり障りのない返答をしておいた。

…「ソレでは私と空が幼なじみだといつのは隠していろ。

なぜなら、周りの態度が鬱陶しくなるから。

中高、と色々学習してきたから分かつて。特別人気のある相手の幼なじみなんて、下手にやるものではない。

そしてその、人気者ぶりはここでも同じ。

海は、私達の会社の…まあ、一番期待の若手社員であり、なおかつ一番人気のある男だつた。

取ってきた契約は数知れず、近寄る女も数知れず。

それでも私にとつて一つだけ救いなのが、その海本人が非常にドライだということだ。だからこそまたそれがモテる原因の一つではあるのだけれど…。

いつも考える。皆ほんとの海を知つたらどうなるだろう。

やつが 救いようのない、猫ヲタクだってことを知つたら。

夜中に一人で飼い猫に話しかけてるアラサー男。花さんがいれば俺は他に何もいらない!と公言している独身野郎。

幾度も皆にその気持ち悪い正体をバラしてやろうと思つては、その事実を知つているのは自分だけだという優越感に負けて、結局は何も言わない日々が続く。

そもそも…私と海が幼なじみだということ、ここでは秘密なのだ。一体誰に言えるっていうわけ?

知らず知らずにため息を漏らす。

と、その時。隣の受付席に座る杉浦先輩が、私の肩をトントンと叩く。

周りを窺つよう耳打ちされる内容とこえぼ。

「キング、高村さんとどうなったかな。空、ビリ弾ひ」

先ほどから出でくるこのキング　他でもない、海のことだ。この会社での彼の立ち位置が、見事に反映されたあだ名だと思つ。

「…まあ？ 私だって、分かりませんよ」

「空も噂位は聞いたことあるじゃないの？ キングが同棲してゐて噂」

「ビリ…？」

目を見開いた。

「同棲！？ いつからそんな噂が。私が知つてるのは、経理の高村さんが最近キングと怪しい、てところまでだ。

「あ、その高村どじやなくね？ ちょっと前までアプローチしてたのが経理の高村だったけど、いま同棲の噂がたつてんのは、またべつの女なのよ。しかも、最近事務の工藤ちゃんも攻めてるみたいで」
ほんとい、ビリ今までいつも女に困らない男だこと。

杉浦先輩はそう呟くと、受付カウンターの横を通りすぎてゆく海に、

形式的な挨拶をする。

「おはようござまわ」

これは仕事だ。私も何事もない風を装つて、おはようござまわと
杉浦先輩に習つた。

幼なじみだと云ふことをバレンタインにするため、海も形式的な挨
拶を返すだけで終わる。

何の会話も、アイコンタクトさえない。

これが、日常。私達の普通。

だけど、今までそれでも良かつた。

日中は他人でも、夜は幼なじみに戻れていたから。あの毎晩ご飯を
供にする時間があるだけで、私はまたいつものように頑張れた。

それなの。」

：海は、きっと平氣なんだ。私と離れることがなんか、痛くも痒
くもないんだ。

そりやなきや、あんなに簡単に有休使って帰るとか言わない。海
のお母さんが、やっと実家に来た海を、ただで返すわけがないのに。

絶対縁談をまとめて、家に落ち着かせるはず。

あこつもそれを分かつて簡単にここから離れようとするとだから、

やつぱり執着心がないのだな。

海が執着心あるのなんて、花さんに対してだけか。きっと同じひで
結婚するつになつたら、花さんを連れてくんだらうな。

確信できる未来予想図に、そつとため息を吐いた。

「で、ほ。そのキングと同棲してゐるつて尊の女なんだかど

「あ、はー」

やつひ、同棲。海が同棲なんて、してゐるはずがないんだけどな。

根拠はある。だつて私は毎晩海の家に出入りしてゐる。

「名前、掘んだのよ」

「…え?」

嘘。まさか実在するんだろうか。

「聞きたい?」

悪魔の囁きに感じてしまつのは、決して私だけではないはず。事実、
杉浦先輩は悪い顔をしてゐる。

「…べつに今まで聞きたくはないですね」

「嘘おつしゃー」

「そう、本当はものすゞぐ聞きたい。だけど、聞くのが怖い。もし、それが本当だつたら、

……私はどうすればいいのだろう。

「キングの部屋に出入りしてゐる女を見たつてこりひとがいるの」

「…………」

「なんといふの会社の社員らしいのよ」

「……え？」

な、なんか悪い予感。

「ほひー、やつぱつにならじやない

「や、あの、わづこやなへ…」

「なんか、同棲つてよつは、通に妻に近に感じみたいなんだけど。毎晩、ちよつとじ飯の時間に出入りしてゐらしくて、私達は晩ご飯作つてあげてんじやないかって予想してんだけど」

ちゅ、ちゅつと待てよ…。

それつてもしかして　　私のことか？

瞬時に冷や汗が出た。

「…………」

私、会社中から袋だたきにあつた

「でね、その名前なんだけど

」

「…………つー

「はな、つていうらしの

「…………はつ？」

はな…？もしかして…花さん？

「いやー、なんかねー、私の友達が偶然昼休憩がキングと重なったらしいのね？そん時、聞いたんだつて。『あー、花さんに会いてえつて恥じてるのを』

「…………」

「意外とキングもストレートなのね。聞いてるひつちが恥ずかしい、みたいな

ねえ空？と問われるけれど、私は答えを返さなかつた。

だつて花さんて…あーつ、まじどんだけ？

「なによ、その興ざめー、みたいな顔」

いやいやこや、興も冷めますから。

だつて…猫テスヨ？

しかも、私が「」飯を作つてあげるのではない。

作つてもいいてる、のだ。

「ま、とにかく。 キングには相手がいるってことよ」

ポン、と背中を叩かれれば、私の気持ちなんて全部杉浦先輩に見透かされている気がして、少しだけ怖くなるのだった。

「つあー、疲れたー空、あんたこの後空いてる？飲みに行かない？」

午後八時。ようやく業務から解放された先輩が、更衣室で伸びをしながらそう言った。

バキバキ、と骨が鳴っている。

「うーん…」

制服から私服に着替えながら決めかねて迷う私に、杉浦先輩は続けた。

「あんた今日元気なかつたじやん。たまにはパートといぐのもいいじゃないの」

「

ほんと、細かいところまでよく気が回る先輩。

感謝しながら、それでもなお迷つて携帯を手に取ると、メールが三件入っていた。

一つはメルマガ、もう一つは、友達から。

そして、最後の一つは

「海…」

「え？ あんた海行きたいの？」

ロッカーに向かつて携帯を握りしめる私に、背後の長椅子に腰を下ろす先輩が訝しそうな声をあげた。

それに対して声が出ない私は、静かに首だけを振つて答える。

恐る恐るメールを開くと、内容は、たった一言。

『今日はカレー』

：一瞬、喉がくつと鳴った。

正直、不安だった。少しだけ後悔していた。

彼女でもなんでもない私が、昨夜のように海を怒鳴る権利なんてないも当然だったから。

今日一日仕事して、冷静な頭で考えてみると。…海が怒ってるんじやないかと思っていたのだ。

だけど、メールが来ていた。

普段、晩ご飯のメニューなんて教えないくせに 。

夜の予定が決まった私は、今さら大急ぎで帰り支度を終わらせる。

メールの受信時刻は午後五時二十分。

きっと、相当待っている。

ロッカーに全部荷物をしまい終えて、乱暴に扉を閉める。

「何？ 急に急ぎだして。なにか

「はい。用事が、あつたんです。杉浦先輩、せつかく誘つて頂いた
のにスマスマ」

頭を下げると、彼女はこいつと笑つて私の頭をひとつポン、と叩いた。

「なんかよく分からんけど。良かったわね

「…………はい

ありがとうござります、お疲れ様でしたー」と言い残して、私は会社を後にした。

海のアパートの前に着いて、ひとつ深呼吸をする。

… までは、昨日のことを謝り。そしてそれから…。

鍵穴に合鍵を差し込む手を、一瞬止める。

… 素直に、言つてみよつかな。今の私の気持ちを。

お見合いなんてしてほしくないってことを。

そつと決まればよし、と自分で気合を入れてガチャッと鍵を開ける。

その勢いのまま、ドアノブを回し、押し開けた。

「う

「あ、空…」

へつ？

言いかけた私の言葉を遮つて代わりに耳に届いたのは、切羽詰まつた海の声だった。

玄関口まで走り寄られてガシッと肩を掴まれば、さすがになにか尋常じやないことが起きたのかと眉をひそめる。

「なに、どしたの」

「花さん見なかつたか！？」

「は？ 花さん？ … いないの？」

「いたはずなんだ。それが、ちょっと田を離した隙にいなくなつた」

正直この時は、海があんまりうきいから逃げたんじゃない
?…どうせすぐ、戻つてくるでしょ。…そり、思つていた。

だけど、事態はそんなに軽いものではなかつたのだ。

この、花さん失踪事件がその後の自分に大きく関わつてくるなど
この時はまだ、微塵も思つていなかつた。

4 消えた彼女（前書き）

先週はすみませんでした 話はできているので2話続けてじゅさせ
ていただきます（^_^）

4 消えた彼女

花さんが消えた。

頭が真っ白になつた。

何で…どうしてだ?

花さんがいなくなるまでの経緯を思い出す。

仕事を定時で agarir、まず空にメールを送つた。

いつも通り来いよ、っていう意味を込めて。

家に帰つた後すぐにカレーを作り初めて…その時にはまだいたはずだ。

そして作り終わつて振り向くと 花さんの姿はすでに消えていたのだ。

ほとんど放心状態の俺を、空の細い手が揺さ振る。

「おい、じりつ、海!ボケるなー部屋はくまなく探したの?」

「あ…ああ

「玄関のドアは開いてた?」

「…いや。帰つてきて鍵閉めて、それ以降ドアが開いたのは今が初

めてだ

「ナニ?...じゃ、窓は?」

窓…。

記憶を掘り起しす。

俺今日、帰つてきてそれから

「あー…開けた。換気して、それから閉めてない」

それか…。

「それだね。自業自得」

「つあーー!!俺としたことが!」

初步的ミスー!!神がいるなら今すぐ時間を戻せ!

「大丈夫、すぐ帰つて来るつて。たまには花さんも海から離れて、一人の時間を持ちたいんだよ」

落ち込む俺の背中をバシバシと叩きながら空は言つ。

「オマエ…なんか面白がつてないか

「いや、気のせいでしょう

「ほんとか?」

「うるせー、しつこい。カレーは？」

「……あるナビ……」

「食べる」

厚顔不遜、堂々とそういう放つた空気、部屋に上るとあたかも自分が家にいるかのようにアドリブとテープルについた。

俺はその姿を見ながら、思わず苦笑いが出るのを自覚する。

メール、間違ったか？

いや、でも……いつものこっこつて戻つて良かつた。

「海、早く」

「ひたぐ、ドゴの姫だよ」

「ドゴの姫だよ」

「…………」

やつぱり間違つてたみたいだな。そんなことを思いながら俺は、カレーを温めるべく、コンロに火を点けるのだった。

こいつと話してたら、なんだかマジで花さんがあつたり戻つてきそうだと思えるから、不思議だ。

温めたカレーを器に盛つて、窓の前に置いてやる。

「 もともと 」

にかつと笑う空の笑顔は、昔から変わらない。

ん、と返事をして俺は台所を離れ、すぐ隣の居間 と並んでいた腰を下ろし、テレビをつけた。

すぐ後ろに置いてある合皮のソファーの座る部分を背もたれにして、絨毯のうえに直接あぐらをかく。

このボロアパートじゃ、下手に音量も上げれやしない。

微妙な調節をちまちまと繰り返し、やつとのことであやんと聞き取れて尚且つわざくない音量を見つけた。

最近流行りのナントカ 残念なことに今前はインパクトされてない が、四角い箱の向こう側で漫才をしている。

…おひ。ここから結構好きかも。

最近の芸人と来たらただキテレツな格好をすればウケると思つてゐる奴が多くて、正直うんざりだった俺。

でも今映ってるコンビは、好きだと思えた。しつかり漫才してウケをとつている。

やつぱ芸人…いや、いつになると漫才師？

あ？芸人と漫才師は別物か？カテゴリーはどうなってんだ？

「…ヤバい、なんか分からなくなってきたぞ？」

本気で考え込んでいると唐突に後頭部がはたかれ、俺の意識は引き戻される。

「…いきなり人を叩く奴がどこにいる」

「愚問でしょ」

「…なに？なんか用か」

「いや、カレーじゅわじゅわ。つまかったよん」

「は？当たり前だろ。俺を誰だと」

「私のコック」

空は普通の、ほんつとーに普通の顔してそう宣のたまつた。

「あれ…私のおかげコックだよね？」

「いや…そんな違ったの？みたいな顔されてもこいつがびっくりですから」

「…まあ、とりあえず座りつか。海ちょっとそこから寄つてよ」

「…へえへえ」

なんなんだ。ここにマジで俺のこと、おおかとせ思つが眞面目にむかえコックだとか思つてんじやないだろうな…。その時は、いくらなんでも鉄拳制裁だ。

「あ、そーいえばあ。知つてた? あんた同棲相手いるんだって」

「え、いぬだら花さん」

「…………」

即答した俺に、空はこれ以上なく冷たい視線をくれた。

…部屋の空気一度は下がったんじやないか?

「空、人を変態を見るような目で見るな」

「ああせつでした。ここに普通の反応を期待した私が馬鹿だった…」

「あ?」

「いいよもつ、諦めた。あんたと花さんは同棲してんのよ。うん、それでいい

わざといじりじく嫌味たらじく、空は首を振りながらため息をつく。

そして、真後ろにある合皮のソファーポスンと腰を下ろした。

「なんつか今馬鹿にしたな?」

「や、してないから

「いや、したね。俺には分か……なあ、空」

「…なに?」

「俺さ

ふと真面目になつた俺に、空が息を呑む氣配が伝わつた。

「俺：花さんと同棲し始めてから、一度も一人の夜を過ごしたことないんだ！今日寝られると思うか！？あのふつさふさであったかい花さんが傍にいないと思うと、俺絶対寝られない！…どうすれば…てか花さん本当に帰つてくるとおも」

「落ち着けッ」

バシッ、と顔に衝撃を受ければ 空にクッシュョンを投げ付けられていた。

「…痛い」

俺の膝のうえに、ベージュの四角いクッシュョンが落ちる。

「あんたねえ、もうほんつと一十六なんだからね？そこんとこわかってる？花さんがいなのは寂しいよ。それは認めるけど。…一人で寝るくらいできるに決まつてんでしょう！？てかしなさいよー！」

空は怒鳴る。

「できない」

俺は反論する。

「できないから オマエ今日、泊まつていかないか」

「

「なー?」

毒気が抜かれたよつた顔で、空はまぬけな返事をした。

「だから、オマエ今日泊まれよ」

「は…え…あの
何で?」

物事に対して、じこまで動搖する空も珍しい。好奇心と加虐心がムクムクと首をもたげてきた俺は、けよつと調子にのつてトドメの一言を言ってみた。

「花さんがいなくて淋しいから。一緒に寝よう」

沈黙五秒。

最初はただぱちぱち瞬きを繰り返していた空は、その後何を想像したのか段々と顔を赤くしたすえ、皿一杯こうわめいた。

「バツ…バツカじやないの!/?帰る…!」

ソフア一から立ち上がるや否や、床に置いてあつたハンドバッグをものすくい勢いで掴む。

一瞬後には抜け出さうとしていた。

「逃げるな」

そう冷静に言い置いて、俺は背を向けた空の右手を捕まえる。

くんっ、と広張つてやれば、空の身体がビクンと震えるのが見てとれた。

「なつ… 今日のアンタ何? おかしこよ」

「せうかもな。花さん娘家出したショックでおかしくはなつてるかも」

なんて口では言ひながら、その実俺は空が背中を向けてゐのをいいことに、めぢやくぢや笑いを噛み殺していた。

「こつ…耳や、首まで真つ赤にして。

ほんと、面白一。

いつこの時の空の抵抗なんて、あつてないに等しいようなものだ。

ほんの少し力を入れてくつと引いてやれば、案の定空の身体は簡単によろけた。

立ち上ると同時に、それを支える。

背後から髪をかき上げて、昔からずっと触りたくてたまらなかつた首筋に、やつと唇で触れた。

「ひゃッ」

ビク、と身体を震わせて、空は一十六年間聞いたことのないような声をあげる。

「う…みつ…」

非難の声があがるが、俺は聞かずにもつ一度首筋に口づけた。

「ん、やつ…やめ

」「こつこじがいのまま性感帯か？」

そのまま、チヨシヒ吸つてやる。すると、空は一際大きく身を震わせて

「やめろ、つて、言つてんだ、しょ…」

背後の俺に、肘鉄を喰らわせた。

「ぐふッ」

「み…鳩尾ッ？ 空の野郎、よつよつと鳩尾に…」

「あんた一体、なんの了見があつてこんなことしてゐわけ…！ 私達

彼氏彼女じゃないんだから！」

空は肩をいからせり、声を荒げる。それなのに、瞳は相反してひどく哀しそうな色をたたえていた。

涙の粒が、今にも田尻から零れ落ちしつゝなほどだ。

「やべ……ひょっとせつすきた？」

「でもな、と俺は反論を試みる。

「……今のは、空が悪い」

「はあー…なんどよつ」

「や、だつて、オマエがあつこつ声出すから。もつと聞きたいて、て思考が勝手にだな…ぶつ」

言葉は最後まで紡げなかつた。

なぜなら再びクッシュョンを投げつけられていたからだ。

痛みが治まるのを待つて、俺の田の前に仁王立ちしている幼なじみを見やる。

「…………、」

なんだ、その顔。俺が逆に反応に困るじゃねーか。

そこにいる空は、照れを怒りで隠しているよつな、恥ずかしそうな、それでいて今にも泣き出しそうな、色々な感情が入り交じった

表情をしていた。

そんな…難しく考えなくていいのに。

俺が思つてゐることなんて、いつも一つなのに。

「ほんとこ、かえる。…ぱいぱい」

視線を床に落としたまま空は呟くと、静かに踵を返して部屋を出でいった。

最後はやけにおとなしくなったな。

不思議に思つて、それでも止めるとはせず、俺は空を見送るのだった。

明日になれば、きっとまたいつも通りに戻るだらう。…そう、思つて。

だけど 考えが甘かった。

その日から五日。

五日経つても、空はおろか花さんも帰つてこなかつたんだ。

…部屋が広い、『飯がまずい。

今夜もまた一人の部屋で、俺はため息をつく。

なんなんだよまつたく…。

田に日に日に疲労が溜まってゆくのが手に取るよつに分かつた。

花さんに触れたい。喉をなでなでしたい。前足を直角に曲げて、そこの毛並みを撫でたくて仕方ない。

うつ…癒しが欲しい！

「うー…あーあ」

それと同時に、空にも会いたいと思つた。

いや、正確には話したいと思つた。

会つだけなら毎朝会つている。

空は同じ会社の受付嬢をやつてゐる為、顔だけは毎日会わせているのだ。

他人として。

儀礼的に。

そんなの、会つてゐるうちには入らない。

だけど、周りの目がある場所では俺たちは親しく話せないから仕方ない。

だから空も、夜に家に来る。

それが分かってるから、俺もあたりまえに迎える。

それが俺たちの日常だった。

また空を十代の頃のようなひどい目に会わせるくらいなら、俺は他人を選ぶ。

それだけのことだ。

だけどさすがに五日も他人でいると、ストレスが溜まって仕方ない。
…まだ少年だった頃から、分かってたんだから。

空とのあの軽い口喧嘩が、普段溜まつたストレスをいつの間にか消してしまえる、たった一つの方法だったことは…。

約束の一週間あと七日。

俺は部屋の壁にかけてある月捲りカレンダーを一瞥して、本日一度目ため息をつくのだった。

5 嫉妬と決心

海と喧嘩してから、十日が経った。その間、私は一度も海の家に行っていない。

「号外！号外！」

「…はい？」

朝。ロッカールーム。杉浦先輩。…あまり喜ばしくないシチュエーションだ、と私は思う。なぜならば

「どうやつ

「…」

「あーああ…相変わらず残念な乳だねえあんた。早く彼氏におつきくしてもらつたら」

…これがあるからだ。

私は杉浦先輩を一瞥すると、彼氏いませんから、と言つて着替えを再開した。

「あんたに彼氏いないってのが不思議なのよねー」

もしかして誰か心に決めたひとでもいたりするわけ？杉浦先輩は言つ。

「…いませんつて」

タイトスカートとベストを着終わって、ロッカーの扉を閉める。古くなっている蝶番ちょうづがいが、キーと不快な音を立て、私は顔をしかめた。

「間が怪しい」

「怪しくない！です！それより、号外ごがいつてどりつしたんですか」

彼氏だの心に決めたひとだの話題を逸らすため、私は初めに杉浦先輩が叫びながら入つて来た号外、という言葉をほじくりかえした。助かつたことに、彼女はあっさりそつちの話題に移ってくれる。といつより、こつちの話題がメインだつたらしい。

まあ、あたりまえか。なんせ一度は準備終えて一階に降りていったはずの先輩が、わざわざ一階のここのに戻ってきたんだから…。

「号外ごがいつて、マジで印刷して新聞ばらまきたいくらこなんだけど」

「はあ…」

なんかそんな重大な事件起こつてたっけ？

考えるけれど、杉浦先輩の次の言葉でその必要はなくなつた。

「キングが！」

…ああ

「彼女」。

なるほど

「フ「うれたつてーー！」

海ネタか…。

「それは…局外ですね」

「つう思つてないでしょ」、アンタ！」

「思つてますよ、ちやんと…きんぐがー？わあそれつてたいへんじ
やないですかあーっ」

「あ、一適当適當適當…空つてキングビッグビッグでもいい人種だもんね、
言つ相手を間違つたわ！」

…どうでもこい？　むしろ興味ありまくつだよ、私のもんにし
たいよ！

そう主張したいのを堪えて、私は代わりに、やうやく思つて出してく
れましたかと平静を装つた。

つたくもー、も「ひ」んな生活抜け出したいつたらないー！

こんな…自分に嘘をつくような生活。

「なんでアンタこきなり不機嫌顔になつてんのよー！」

「なつてません!」

「なつてんじやないのーせつかくキングがはなむとせりと別れて
独り身になつたつての?」

…色々違つねうな微妙に合ひてゐるよいな。

おもむろに、杉浦先輩はハアと息をつく。

「それにしても…あのキングがフリだるなんて、一体どんないい女
なわけ?」

とこりか…猫です。

「あ、ねえ空。あなたは参戦しないの」

「…まい?何?ですか

「キング争奪戦」

海争奪戦?

「向坂さん、お食一緒しません?」

「あの、それよりだつたら私お弁当作つてきたんで広場で…

「向坂くん、今日の夜空見てる?……………え?」

なるほど、こういうことか。

昼休み。エントランスで繰り広げられる女の鬭い。

私は、それを他人事のように眺めていた。…いや、実際ここでは他人事なんだもの。

ストレートにお昼を誘う人もいれば、初っぱながら弁当を作つてくる人。なのに誘い方は控えめつていう人もいれば、あからさまにそつち系を誘つてる人。

…いろんな人がいるけれど、皆海狙いだつてことに変わりはない。

受付に座りながらぼんやりと見つめれば、沸き上るのはまぎれもない焦燥と、寂寥せきりょうだった。

海はほんとモテる。今まで当人があんなドライな感じだつたし、花さんがいたから私は無意識にタカをくくつていたのかもしねり。

海に特定の相手なんかできるわけないって。

だけどその認識は、今、数人の女性に囲まれてる海を見て覆された。

今の海はもう、ガードを解いている状態だ。

意識的なのか、無意識なのか。

花さんがいなくなつたから脱力してゐるのか、期限がせまつたお嫁さ

ん探しを本格的に始めたのか。

…十日も離れている私には分からぬ。だけど、これだけは確かだ。

『海はガードを解いている』

より分かりやすく言ひうと、前まであつた近寄りがたい冷たいオーラがなくなっているのだ。

今はなんかもう、来るもの拒まずな雰囲気を出している。

だから一気にモーションをかけてくる人が増えたのだらうと思づくれど。

相変わらず取り合いになつてゐる渦中の人物を見やると、どうやら勝者はあからさまな誘いをかけていた女性らしい。その人以外は皆、散り散りになつていた。

まあ口調からいつてあの中で一番先輩みたいだし、綺麗だし、スタイルいいし…。

見ていると、海の腕に自分の腕を絡ませ、寄り掛かっている。見ながらに豊満なバストが、自己主張するかのように押しつけられていた。

ああ…お似合い。海は今日午前であがるつて杉浦先輩が情報持つてきたし、もしかして、あのまま一人でどつか行くのかな…。

想像なんてしなきやいいのにしてしまつた私は、唇を噛みしめて俯

く。

だめだ、だめだ。今は仕事中。顔 上げる。

自分に言い聞かせて顔を上げた。その瞬間、海と日がつた。

他人のふりをする。

「空…、お待たせつ。次はあんたが昼休け……空」

寄り添つてエントランスを出ていく一人を見送つた。

「空…」

呟いて、先輩の指が私の頬を触る。

「あんた…泣いたの?」

指摘されてから気づいた。

私の頬には一筋だけ、涙の後が残つていた。

5 嫉妬と決心（後書き）

クライマックスですよ～！来週もよろしくお願ひします（、）

約束の期限まで、あと四日。

「花ちゃん。おーい花ちゃん」

お願いだから返事してくれよ、と俺は切実に思った。

時刻は午後六時を回った頃。まだライトがなくとも見えるが、それでも黄魔がとき、段々と影が溶けてなくなつていいくのが分かるような微妙な暗さの時間だった。

昼に退社してから一度家に帰り、それから俺は今までずっと花さんを探し続けていた。

「駄目だ…全く見つかる気配がない」

心底うなだれ、嘆息する。

花さん…「行つたんだよ。オマエがいなくなつたおかげで霸氣のなくなつた俺が、女豹どもに狙われてるじゃねーか。

花さんがいれば毎日うひこくらじ元気なの…ッ！」

彼女が帰つてこないかぎり、俺は気になつて夜も眠れない。というか、実際ここ最近、毎晩眠れていない。だから霸気がなくなるんだ、と俺は毒づく。

肩を落として、思わず頭を搔き回した。

…花さんのことだけでも相当な問題なのに、今の俺こま、もう一つ
気になることがあった。

空のことだ。

あいつに、聞きたいことがある。

花さんを探しながらずっと、いつも今口電話で呼び出してしまおう
かと考えていた。

だけどそれはありなのか？

俺が怒らせたのに？

気分が晴れなくて、頭痛までしてくる。

……思い余って、濃紺の空を仰ぎ見た。

これでちゅうとは氣分が晴れるだろうか なんて考えて。

それからまた一時間花さんを探して、諦めた俺は家路に着いた。

歩き回つて疲れた体を引きずつてアパートまで戻る。

敷地内に入ったその瞬間、俺は信じられない光景を目にした。

部屋に電気がついている…?

消し忘れ?いや、ありえない。家に帰ったのは僕だ。まだ電気なんてつけない。

だったら。

俺は部屋の前まで走ると、疑いもなく扉を開け放した。

案の定、狭い玄関には一対の女性ものの靴が脱いである。

扉を閉めて内鍵をかけ、その隣に靴を脱ぎ。すぐさま居間に行くとそこには、ソファーではなく床に直に座つてじりじりを見つめる空がいた。

海、と駆け出はやけに落ち着いた風に俺を見上げる。

「おかえり。遅かったね」

「……」

なんとか分からぬ。そんな空を見て胸がざわついた。

それを押し戻すように

「オマエ、なんで」

来たんだ?怒つてゐんじゃなかつたのか?

やつぱりおつとしで、思い直した。この際それまでいるといつ。

「…や、それより聞きたいことがあつたんだ。空、オマエ

「うつうじこい。私も海に言いたいことがあるの」

言葉をやえぎられた。笑顔を作る空は、俺の目の前で静かに立ち上がる。

その一拳手一投足を、俺は黙つて見つめていた。

「なんだ? こここのこのこの雰囲気。

いつもとは違つ空氣を肌で感じとる。

続ける言葉は見つからず、ただ立ちすくんでいた俺に、空は静かに右腕を突きだした。

その手は、堅く握られている。

無意識的にその拳に合わせて手のひらを下に差し出せば、

「返す」

そこには何かが落とされる感触と、感じるのそれの冷たさと硬質さ。

「は……」

視界に入れて確かめる。

それは、この部屋の鍵だった。

「そもそもこれは、私が持つてることがおかしかった。私達は、た

だの幼なじみなのに

「な……」

「もうやめる。ここに来るのも。海と関わるのも」

言いたいことは、それだけ。

やつ駄くと窓は、床にあつたハンドバッグを掘んで俺の横を通り過ぎようとする。

その情景が、口元送りのようこじて皿に映っていた。

ひどくやつくり、確實に。

予想だにしなかった言葉に一瞬我を忘れる。だけど俺は意識を取り戻すや否や、すぐに空の細腕を捕まえた。

「こきなり何言つてんの？」

「ずっとつてこいつから」「
「こきなつじゃない。ずっと考えてた」

「こつからだつていいでしょ？ 海にはもう関係ないんだから」

「それが意味分かんねえつて言つてんだよー。」

自分でも意識しない内に大きな声が出た。

空の肩が揺れるのを認めたけれど、俺は強引に腕を引いて空を自分に向かい合わせる。

「痛い、離して」

「嫌だ」

「離してよ」

「嫌だ、って言つてるだろ」

「なんで？なんで離れさせたくないの」

……離れさせてくれない？なんだよ、それ。

「……どうこう意味だ」

っこ責める口調になつて、空の腕をつかむ指にも力が入る。

つまり、ここは俺と一緒にいたくないってことか？

だから離れたいと？

そう詰問しようとした空の顔を覗き込んで、だけど次の瞬間、俺は息を呑んだ。

泣いてる。

「…………っ、」

音もなく、静かに。何の前触れもないまま唇を噛み締め、ただただ空は涙を流していた。

な、んで。

行き場を失つた言葉はそのまま搔き消え、ただ静寂だけが残される。

そして、空自身の嗚咽まじりの涙声がその静寂を破り、狭いこの部屋の空気を震わせた。

「もう、嫌、なの。私いつまでこひんないしやいけないわけ？」

「

「海は、今に結婚しちゃうんだよ……。…そんなの、傍で見てたくないっ」

一転、息をついて、震える声で空は静かに続けた。

「女の子に冷たくなくなつたのはなん……？結婚相手を探してからなんでしょう？耳聞のあの人と、付き合つの……？」

空の涙は止まらない。今なお線路の上を辿るように、決められた雲の後を伝つ。

「……だから、お願い。離れさせて。もう、海の視界に入らないことに、他人のフリすることに、限界を感じた。…その鍵は、恋人に渡してあげるべきなんだよ」

それだけ、じゃあね。さつ踵を返さうとする姿を見た。俺は、行かせなかつた。

「つ、人の話を聞いてた！？」

「聞いてたよ。それで分かつた」

「は！？何がよつ」

「オマエはなんか、大きな勘違いをしてる」

「勘違いなんかしてない！私は

「一やーー」

空が何かを言おうと口を開く。

息を吸う一瞬のその隙に、本来ならここで聞こえるはずのない声が部屋に響いて、俺たちは会話も、体の動きもピタリと止めた。

い、今 花さんの声、しなかつたか。

二人して顔を見合させて、一瞬あと俺は一目散にドアに駆け寄る。

「花さん！？」

カリカリと扉を引っ搔くような音と、か細い泣き声。

はやる気持ちそのままに扉を押し開ければ、俺の愛しの花さんその人が、扉の前にすまして立っていた。

「あ、おまえ今まで『口に』」

「

そこまで言つてからはつと氣づいた。

「オス猫…」

いつの間にか玄関にしゃがみ込む俺の背後に立っていた空が、上から覗き込んで、俺の心の内を読んだかのようにそり声を落とす。

そう オス猫だ。花さんから約三十センチ後方に、見覚えのないオス猫がいる。

だからか？ 恋人ができたか？ 何日か帰つてこなかつたのか！？

ふう…と後ろに傾げやつになるのを空が「あ」と呟く。

背中にあたる手の小さな驚いた俺は、自身の力で跳ね起きた。

「 、わ！」

「…こ…よ、べつに」

ふと見ると、花さんはグレーの毛色のそのオス猫と、寄り添つようにして立っている。

顔をすり寄せたその顔は、俺が今まで見たことないくらい穏やかで、幸せそうだ。

それを認めた瞬間、俺は肩の力がふと抜けるのを感じた。

ああ…花さんも見つけたんだ。

一生添い遂げる相手を。

じゃあ、俺は
？

よし、と呟いて立ち上がる俺に、空は怪訝な目を向ける。

「空、花さんたち入れて。んで鍵かけて」

「は…」

何で私が、と目が訴えているのが見て取れた。だけど、

「帰らせないからな。オマエもいひつけ」

そつ言いつと空は田を見開いて、その後渋々と言つた様子で従つたの
だった。

それを尻田に俺は、ソファーの上に投げ出していた携帯を取り上げ
る。

かける先は実家だ。

生まれてから今まで、何千何万回と聞いた　　かどうかは定かで
はないが　　「ホール音が幾度か鳴つて、「はい向坂です」と母親
が出る。

「ああ俺、海だけど」

『海ーー。』

キーン…。

耳に響いた。

受話器越しに空にも声が聞こえたのか、居間にいる俺の近くに来て
おまさん?と口パクする。

俺も首肯した。すると、空の表情が曇る。

『約束の一週間はまだよー?まさか一生独身でいるなんて言いだ
すつもりじゅ』

例に漏れずマシンガントークを始める雅子を、俺は遮った。

「違うよ。結婚相手、いるし」

後ろの空がびくっと揺れる。

『…また花さんだとか言つんじゃないでしょ!』

「人間だつの」

『嘘おっしゃいー今までずっとみつからなかつたあんたがホントに
一週間で見つかるわけがないでしょ』

雅子…結婚して欲しいのか欲しくないのか、どっちなんだ?

俺は受話器を通して気がつかれない程度にため息をつく。

「確かに、この一週間で見つけたわけじゃないな。ずっと傍にいた奴だから」

そう言いつと、少し間を置いて。

『……ああ、そう……やうなの。分かったわ』

「ああ

「分かってるよ」

『一ヶ月以内に連れできなさいよ。色々あることがあるんだから』

それからまた一、二言かわして、俺は電話を切った。
珍しく物分かりが良くて助かったな。

ぞんざいにソファーに携帯を放れば、空が弱々しく俺の服の袖をつかむ。

「海…今のどうこう

「そのままの意味だけど?」

返答を待たず、空を抱き寄せた。

「結婚するか

「、」

姫は腕のなかで、かすかに唇を上げてこる。

「……姫?」

「な、んで……」

「ん?」

「こま、れい…」

「今やういか?..」

そう笑つてやると、胸をズレと呂がれた。

「今やうだよーなんであんたつてね、自分勝手なのー。いつも私の気持ちなんて考えないで」

「だから、俺が好きなんだ?..」

「ーーべ、べ」

べつにそんなこと、姫は逆に入りやうな声で呟く。

声小さご、極小さご。

「俺女心は分からなくても、空心ならかなり分かるからね~」

「な、なこを言つてんの」

「つまり。いついちだつて昔から、一緒にいるのはオマエ以外ないと思つてたつてことだよ。それが分かつてたから、俺焦つてなかつたんだぞ」

言しながら抱きしめていた胸中を、ポンポンと叩く。

「…でもー私に花さん預けてお見合いにしてしまつて言つた

「あれは、焦るオマエが可愛かつたからつー」

「つ、つ、でそんなこと言つた、バカ！私がどれだけ

喚ひつとすむ空の顎を、俺は優しく持ち上げる。

「…………う、待たせて悪かつた」

「…………う、

み、と言いたかったんだろうか。

「もう、肘鉄すんなよ」

…赤くなつた空に苦笑して、俺はそのまま、わつと唇を重ねた。

…じまじへじへ離れると、空は手のひらで顔を覆つて、まじまじ泣く。

「泣くなよ

「…だつ、て…つー私はもうずっと、無理だと黙つてたから…つー」

「おれはもうずっと、空以外の女は微塵も頭にないよ

良いことを言つたはずなのに、空はひとつひとつ声を出して泣き始める。

ああまつたく…。

愛しくて、仕方ない。

一度空を放して、先程までの一連の騒ぎで床に転がされていたこの部屋の鍵を、拾い上げる。

次いで空の左手を取つて、それをしつかりと握らせた。

「オマエが言つたんだからな。恋人に渡せつて」

「…、」

「大体、なんとも思つてない奴に俺が鍵渡すわけないだろ。それくらい察しろ」

実際は何も怒つていなければ、わざと少しだけぶすつとしたふうに言つてやる。すると、空は何度も何度もつかえながら、アンタは昔から分かりにくいく答える。

「でも、好き」

最後に、そう付け加えて。

俺は、小さな婚約者をもう一度静かに抱きしめた。

最終話 もじて（前書き）

お待たせ致しました、最終話です。

最終話 そして

ずっと、叶わない願いだと想つてた。

『気持ちを自覚したのは中学生の時で、それからずっと。

私は海の傍に幼なじみとして歸ることはできても、女として歸ることはできないんだって。

だけど今。

私は、焦がれて止まなかつたこいつの腕のなかにいる。

これで泣くなつて言つまつが、無理な話だ。

よつやくひきつけがとまると、ゆつぐり頭を撫でていた海が、不意に私を抱き上げた。

「わっ…、なにす」

「いーからいーから

非難めいた声を上げても、随分と機嫌がよれりつな声で軽くかわされる。

いつ、一体何する気…。

心の中では大反抗していても、その実海に抱えられている私はおとなしいものだった。

だって、好きな人に触れられて拒絶できるわけがないでしょ「うーー！」

「よつと」

連れていかれた先は、ベッドの上で。

優しく降ろされるけど、何がどうしてこうなったのか事態がつまく飲み込めない私は、ただ呆然とするばかり。

体の上にまたがられ、上着のジャケットのボタンが外された時に、はっと覚醒した。

「う、海！？」

「んー？」

答える声もなんか機嫌いい！！

「いや、んー？じゃなくてねー？いきなり何をすんのー？」

「既成事実を作りつかと」

「はー？」

「既成事実作っちゃえば、オマエも逃げられないんじゃないかなと思つて」

「なつ……馬鹿言わないでよ！そんなことしなくて私逃げないし！」

「あ、今のいい。なんかキた」

「 つー！」

だめだここの頭のネジ飛んでるー

自分の顔が熱くなるのが分かった。

しかも、いつの間にかワイシャツ一枚にされてるしー。

「ちよちよ、ちよつと待つてよー私まだアンタに聞きたいことが

シャツのボタンまで外し始めた海の骨張った手を、上から握り締めて動きを止める。

「あ？なんだよ」

「は？昼間の女？」

「は？」

一瞬眉をひそめた海は、それからあ、と呟いて呆れたふうに息をついた。

「だから、それが大きな勘違いしてるって言つてんだよ

「えつ」

「あの人とはなんでもないつつ。一緒に会社抜け出そうとか言つから、めんどくさくてマジで一緒に外に出たところで、一緒に抜けたんじゅあこれでつて置いてきた」

「……は？」

な、なんだそれ。つまり　海はその人とはほんとに何もなかつたつてこと？

「第一、俺が会社早くあがつたのは花さん探しの為であつて、あとは知らねーって、ああそつか。それでオマエあの時泣いてたんだな」

「…え？」

ぎくへじと涙を呑む。

ま、まさか…。

「コントラインスで。俺と田が合つたとき、泣いてた」

やつぱりその時かー。

私自身が涙を流してたことに気づいた時には、もうあとが渴いてたものだから、ずっと不思議だったのだ。

いつ泣いたんだろう、って。…その時、だつたんだな。

「う〜…」

それを聞くと、なんだかますます海を好きだと主張しているようと思えて、無性に恥ずかしくなった。

思わず唸る。すると、海が吹き出して私のおでこにキスをする。

「納得した。俺の聞きたい」とってそれだつたから

あんまり優しく微笑むものだから、私はなんにも言えなくなつてしまつ。

それを続行の許可が出たと解釈したのか、海はまたボタンを外し始めた。

「あ、ちょ…っ」

「いーから。黙つて俺に抱かれなさい」

「……」

「早く孫の顔見せてあげろって言つたの、オマエだろ

たつ、確かに言つたけど、決して『いつ意味じゃない……』

焦る私をよそに、今度こそ海は止まらなかつた。

頬に。瞼に。額に。唇に。

口づけされればされるほど、頭がぐるぐるして、意識が朦朧とした。

「うみ……」

「……ん?」

必死になつて名前を呼ぶと、海は優しい声で答えてくれる。

「…………ありがとう」

「…………え?」

私を翻弄する海の手が、一瞬だけ止まって田が合つた。

擦れた声で、それでも私はいま、この田の前の愛しい幼なじみに云
えたいことがある。

「隣の家に生まれてきて……ありがとう」

生まれてきて……ありがとう。

傍にいてくれて……ありがとう。

気持ちをくれて……ありがとう。

そんな想いで言葉を洩らすと、

「…………そのままオマエにしてやるよ」

海は、不敵な笑みでそつと答えるのだった。

夜が明けて、上半身だけを起こした俺は、まだ隣に眠る空の寝顔をじっとばかりに見つめる。

今は寝てるから咎められないけど、ここつ起きてたら絶対、見ないでよーとか言って殴つてくるんだろうな。

だいぶ光景がリアルに浮かんで、苦笑する。

まあ、そんなやつどりも幸せなんだけど

…「わ。なんか今の自分、頭涌いでる。

つらつらと考えながら、空の髪を梳いた。

朝の静かな空気が、じつしていることを無条件で許してくれている気がして、思わず頬がゆるむ。

しばらくそうして撫でていると、今まで部屋の隅に静かに丸まっていた花さんが、ゆっくり立ち上がった。

「？」

何をするのかと注視していると、なんと彼女は俺たちのいるベッドに歩み寄ってきて、しかもその上に飛び乗ってきたのだ。

は、花さんが自ら俺の傍に…！

初めてテレテレになつた！

感動に打ち震えて手を伸ばすと、これまたおとなしく撫でさせてくれる。いつものやられた、みたいな表情もしない。

ついに俺は花さんの心を手に入れたぞ！

じーん、と感じ入つていると、横から落ち着いた声が聞こえた。

「変態猫ヲタクなのは、変わらないんだね」

「……………変わらないつて、こいつと比べて？」

逆に聞き返してやると、姉は黙り込んで顔を背けた。

「KHNさん？ めーい

「…うるさいつ、この、バカツ」

數日後。

۱۳۹۷

「あの、黙つてたけど実は幼なじみで…」

……私が情報が早い杉浦先輩に質問攻めにされたのは、言つまでもない。

『なんで花さん然り、俺の彼女はシンデレバつかなんだろーか…』

『…それって私もシンデレだつてこと?』

『シンデレ以外の何者でもないだら』

END

最終話 そして（後書き）

読み、ありがとうございました（^ ^ ^）最後はすつきりまとめたくてこうなりました。ほんとはもうとラブライブ時間を描写する予定でしたが、それは番外に回すことにします、数回中にこの続きの形になる番外編をいくつか載せたいと思いますので、よろしければそちらもどうぞ、Special Thanks この物語を読んでくださったすべての方々へ。

番外編1 僕達、結婚します。

秋の初め。少しずつ冷たい風が混じるようになってきたその日、俺は上司に結婚の報告をした。

返ってきた答えは心からの「おめでとう」で、それから少し意外だつたとも言われた。

少しだけ長い休みが欲しい、と言つと普段の仕事ぶりのおかげか返事は色よい〇〇で、これで実家にとりあえず行ける、と内心ほっとしたのはいつまでもない。

…雅子がつるせいからだ。

「あのよ向坂…」

「あ？」

そんなある日のことだった。上司に報告を終えて自分のテスクに戻ると、例によつて例のごとく俺の同僚横川が、やけにおどおどしながら話しかけてきた。

何?と聞き返すとチラチラしきりを伺いながら言葉を続ける。

「おまえ…休みとつたんだってな」

「とつたけど?」

「その理由なんだけど…その…まさかとは思つんだが…俺の聞き

間違いだと思うんだが…」

「ああ、結婚するからだけど」

「頼むから嘘だつて言つてくれよ～～～」

答えを受けるや否や、横川はそう悲痛な声を上げた。

「オマエは一生プレイボーイなんじやなかつたのかよー。結婚しない仲間だと思ってたのは」

「おまえだけだ」

「この俺とおまえと一緒にしないで欲しい。」

椅子に座る横川を思いつきり睨み付けてやつた。

「つーか、横川は結婚しないんじやなくてできないんだろ」

「そんなんほんとの」と言つなよ～～～！」

「えつ～～？向坂センパイ、結婚するんですか～～～？」

割つて入ってきた声は、もはや人の話に首を突つ込むのが通常スキルとなつてゐる、東海林だ。

甲高い声 + 今は驚きに開かれた大きな目。

向かいのテスクに居ながら「」まで毎回話に入つてくれるとは、相当図太い。

「するけど。… そんなに驚くことか？」

「あたりまえじゃないですかあ～つ！『あの』向坂センパイですよ～！一体誰ですか！？誰が難攻不落のセンパイを落としたんですか！？」

「そうだよ…俺もそれを知りたいんだよ…どんだけレベル高い女が言い寄っても全く相手にしてなかつたオマエが…気になつて夜も眠れないよ…」

「あしたちの知ってる人ですか？」

東海林が田をキラキラさせて見上げてくる。

横川が恨めしそうに見上げてくる。

俺はそんな二人を無表情に見下ろす。

「……知ってるんじゃないのか。この会社の受付嬢だから

そつ言うと、二人は一瞬固まって。

『あの、髪長くて背が高い美人なひと…？』

… そう、ハモッた。

俺は前から思つてたんだが、こいつら結構いいコンビだと思う。

…悪い意味で。

つらつらと考える俺を尻目に、横川と東海林の会話はエスカレートしていく。

「いやー、あの人か。確かにあの人ならありかもな。噂じゃ気も利いてなかなかの情報通らしいし」

「ああーっ、あたしもそれ入社してすぐ聞きましたよ！分からぬことがあつたらまずその人に聞けば大概のことは知れる、って」

そつかあの人かー、としきりに頷く一人を、俺はぴしゃりと遮った。

「違う。そつちじやない」

『は？』

「…髪はボブの、背は低くて至つてふつうの顔の方

『…え、そつち？』

言いながら、そつかが客観的に見れば空つてそう見えるのかと初めて思つた。

「つて、あの…それ、向坂先輩自分で言つちやいますか？」

「そうだ向坂、仮にも自分の婚約者だぞ？」

「だから、客観的に見たらつて話だろ。俺から見たら つて、

「なんでおマホーリーになら」と言わなきゃならなんだ? 東海林、その生暖かい笑みはやめろ

「ええ~、無理ですよ。だって、あのセンパイが

「…いつからなんだ?」

変な方向に流れそうだった話を戻してくれたのは、打って変わつて真面目な顔をした横川だった。

…うようとはまともな会話もできるじやないか、と思つたのはそれでおいで。

俺は質問に對して、逆に質問で返した。

「やれせどりにかかる『いつから』だ? 好きになつたとき? 付合つたとき? それとも結婚を意識したとき?」

「全部だよつ

横川は瞼み付くように囁つ。

全部つて、そんなの。

「最初からじやねーの

「…は? 入社して初めて会つたときから? とか? 一田、あれ?」

「違つ、やうじやなくて。物心ついたときから? とか?」

そう告げると、横川と、同じように聞いていた東海林が一瞬きょとんとする。

「もしかして一人…幼なじみなんですか？」

「ああ」

「…マジ、マジですかそれー！ええーっ、すごいーー向坂センパイの幼なじみなんて憧れるんですけどーー！」

ついに東海林は椅子から立ち上がる。

「ていうか、羨ましい！もはや妬ましい！」

「東海林、ちょっと落ち着けよオマエ…。それにしても向坂、今までそんな情報、ひとつも聞こえてこなかつたぞ？なんで黙つてたんだ？」

「そーですよーーなんで教えてくれなかつたんですか！？知つたら他の子だつてやりよつが」

「それだよ」

これから昼休憩の俺は、上着と財布を手にして東海林の言葉を遮つた。

「…それがあるから誰にも言つてなかつたんだよ。周りが何するか分かつたもんじゃないだろ？空に辛い思いはさせたくないんだよ。分かつたか？」

それだけ言い残して、俺は部屋を出た。

一瞬沈黙が流れで。

「きやーー空だつてえー！聞きました、横川センパイ！」

「聞いた聞いた。ベタ惚れだな」

そつ音が届いて、言うんじやなかつたと心底後悔した。

「ただいま…」

「お帰りー、どした？なんか疲れてる？」

「半端なく

あの後いつも通り仕事をこなして 至る所である最悪コンビの
冷やかしを受けたせいで、体力の消耗は著しかつたが 、いつ
も通り定時で帰ってきた。

電車と徒歩でもともと減っていたエネルギーが、もはや擦り切れた
と言つても過言ではない。

俺は部屋に上がるなり、合皮のソファーヒツヒツぶせで倒れこんだ。

「ご飯、私作るつか？」

花さんと戯れていた空が、珍しく気遣わしげにそう俺の顔を覗き込

んだ。

うわ、俺のこと専属コツク扱いするこいつはやんこと言われるくらい、俺疲れて見えてんの？

びっくりしながらも、体は起き上がらない。ああ駄目だ…力入らね。こんな状態なんだから、正直言つて空の申し出はとてもなくありがたい、というのが本音だ。

本音なんだけど。

「オマエ、俺を殺す気か？」

「今ここで死にたいの？」

…これも切実な問題なんだよ！だつてオマエ、料理できないだろ！？なんか毒とか作っちゃうだろ！？

そう胸中では叫んでいても、実際は黙り込んでいる俺。

これ以上空の逆鱗に触れちゃ困るから、人生賢い選択をして生きましょう。

「…空、べつにオマエの料理が駄目だつて言つてるわけじゃないぞ？ただ、人には向き不向きがあるつて言つ話で」

ああだめだ、余計嘘っぽいこれ！

冷や汗を流す俺に、空は予想外に吹き出した。

「ふ…ひ、言つてゐからそれ。いーよもう、私は料理しない方が良いってこいつのは昔から分かつてたことだし。それより花さん抱っこする? ビーセ癒し欲しいとか言つんじやないの?」

「……うん、言ひ。花さん連れてきて」

「はいよ」

うつぶせで寝る俺の前に、花さんが空の腕から降りられる。

今日も惱殺の勢いだな花さんは…。

ゆっくり撫でてやると、彼女は本格的に枕元に座り込んで、喉を鳴らしはじめた。

「あー…まじ癒される。花さん最高」

小さく呟くと、それまでそばにいてその様子を眺めていた空が、呆れたため息を吐いた。

「……相変わらず花さんバカだね、海は。私、なんかできるもの買つてくるから待つてて」

じゃ、行つてくるから そう続けてそばを離れようとした空を、俺は手首を掴んで引き止めた。

「いいよ、買つてこなくて」

「え、だつて！」飯

「

「ここから」

「なんで……んつ、」

空の言葉を最後まで聞かずに、俺は口を塞いだ。
中腰の姿と、うつ伏せから上半身だけを起こして振り返っている形
の俺。

掴んだ手首は、そのまままで。

触れ合っただけのキスなら問題ないけど、だんだん深くなつてみると
この体勢はきついものがあった。

てこうか、軽くチュウとするだけのつもりだったんだけど、匕ひじ
よ口く。止まんねー。

「うみつ……ほつ

「……つ、」

だーかーらあー、やうこう声出すから俺だつて止まらなくなるんだ
る。

完全にソファーから立ち上がって、空の後頭部を右手で押さえ込んだ。
だ。

びく、と反応する空を無視してせりて口を詰める。

耳に囁く声は、どんどん艶っぽさを増していく。

「ヤバイ。俺が、ヤバイ。

一瞬だけ唇を離して、鼻と鼻が触れ合った距離で空、と名前を呼ぶ。

なによ、という強気の返答が可愛いんだが、今は。

「『メン…』のまま続けていいか」

「まつ?」

「もう止まれそもそもない。これどうにかしないとメシなんて喰えねー

これ、ところが空にも分かつたらしく。顔を真っ赤にさせて、俺の胸に両手をつぐ。

「バツ…バツカじやないの!…自分でどーにかしなさよつ

「バカはオマエだ!なんで相手がいるのに一人でしなきゃいけないんだ!オマエ鬼か!」

「うるせこりうるさこりうるさい!だって最初にキスしたの私じゃないもん!自業自得なんだから自分で責任とつてよおーー!」

「ほー。じゃあオマエは俺がここでピトオとか上映会始めちゃっていいってことか?そつこいつどだな?」

「それせ……っ」

ぐつと言葉を詰まらせる傍に、俺は勝ったと勝利の笑みをそのまま刻む。

「だろ？ 嫌だろ？だから いじつ

いきなり右足の甲にしつことした痛みを感じて、俺は顔をしかめた。

見ると、花さんが爪をだしで弓つ搔いている。

「いやー

「なんだよ花さん、やきもちか？仕方ないなあ～じゅあオマヒモ」

つちくくるか？」

抱き上げようとして手を伸ばすと、

「フーッ……

めひやめひや威嚇された。

なんだ？ 空をこじめるなってことか？

「花さんーーありがとー、今このバカがねー

「おー、バカってなんだ」のやう

しかも空が手を伸ばすのには、花さんは威嚇せずこもとなしく抱かれている。

なんなんだー一人して！

もう諦めた、と台所に向かう俺の耳に、空の消え入りそうな声が届いた。

「海…」

「あ？」

「あの…嫌なんぢゃないからね？その…恥ずかしい、だけだから。まだ、い、痛いし…」

「　　」

回れ右して、空のもとまで戻る。

頭をポンポン、と叩いて俺は苦笑した。

「分かってるよ。そんな泣き声つな声出すな

「な、泣いてないし…」

「嘘ついた

ま、なんだかんだ言って幸せなんだよな、と改めて思つ。

「…そりいえばね、今日杉浦先輩に海とのこと聞かれた。実は幼なじみだったって言つたら『最初つから聞いてない！』って怒られた」

「だらーな。今日上司に結婚するつて報告したから

情報はいくらでも漏れてるだろ。

「それよりオマエ、なんもされなかつた?」

なんのことを見たのかは空も重々承知しているのだらー、笑顔で
こぐりと頷く。

「結婚つてなるとさすがに皆戦鬪意欲失うみたい。あと何より、杉
浦先輩と一緒にいると権力強いから」

「あー……なるほどね。すっげえ納得。まあ、助かるな、俺がずっと
一緒にいられるわけじゃないし」

そうつ言いと、空は一瞬安心しきつた笑顔を覗かせた。

「……うん。私は大丈夫だから。海は、しつかり稼いできてね」

「……これ以上、まだ稼げと?」

「……あのね?誰のせいでそうなつたか分かつてん?もし赤ちゃんで
きたら、お金ないと困るんだから」

「う……それを言わると弱い。」

「ま、まあお金は任せとけ。だてにヒートじやないぞ」

「そ、ならいいけど」

ソフナーに腰を下ろしながら、窓は窓へ。

「でもしありくは、ふたりきりの結婚生活楽しめたいなあ

横顔に、心臓が跳ねた。

最後は、こいつの言づき通じてやがてだらうなあ。

そんなことを思った、ある初秋の晩だった。

番外編1 僕達、結婚します。（後書き）

はい、お待たせしました申し訳ございませんでした一番外編となり
ます^ ^お気づきの方もいらっしゃるでしょうが…そうです、『
1』といふことは2もあります（笑）時系列的にはこれより更にも
う少しあとになりますかねー。そんなわけで、もうしばしお待
ちを¥(^〇^)~

番外編 2 私達、結婚しました。

例えば、書類に名前を書くとき。

例えば、初対面の人へ挨拶するとき。

例えば、家に帰るとき。

結婚したんだなあ、って実感する。

「ねえ、叶空」

「…向坂空です」

「え？ 聞こえないんだけど叶空」

「…杉浦先輩。一体いつまで、その嫌がらせは続くんですか？ もう一ヶ月は経つてますよ…」

「うるさい。隠しごとしてた罰と、私より早く結婚した罰よ」

「だから隠してたのは謝ったじゃないですか…。それに結婚が早かつたのは不可」と

「分かってるから言わないでくれる？」

にっこり微笑む美人な先輩。目が笑っていなくて、正直怖い。

今は普通に仕事中で、私達はお互い前を向いたまま、あたかも会話をなどしていなじようて会話をしていた。

海と結婚してからもう一ヶ月。杉浦先輩はあれから「あるい」と云ふ姓で呼んで、嫌がらせをしているといづか、単にからかっていふといづか。

「…いい加減やめてもいいと思つただけど。

まあ、私がそれをこの先輩に進言できぬはずもない。

「べつにあんたをいじめるわけじゃないのよー。あんたがキングと結婚したのは本当に嬉しかったし」

「え？」

「だって、キングのことずっと好きだったでしょ？ 見ててすぐ分かるわよ、そんなの」

「…やつぱり分かつてたんですか」

「うん。お露骨にキング関係避けるんだもの。そりゃあ逆になにがあるなつて疑うのも無理ないわよ」

「…え、ですか」

「でも私はいつも想つ。

そこまで人のこと正確に分析できるのも、あなたくらいです

よつて。

「まあ、たすかに幼なじみだとは思いもつかなかつたナビセー」

「そりやせうだ。私達はそれがばれるのを、何よりも恐れていたのだから。

くすつと笑うと、先輩が敏感に反応する。

「あ、あんた今笑つたわねー何がおかしいの」

「何でもないですよ」

「秘密主義の女よね、ほんと。あんたら夫婦の名前の方がよっぽど笑えるつてのに」

「へ？」

予想だにしなかつた言葉に思わず顔を向けると、バカッ前向いてなさいと囁められた。

「向坂海に、向坂空。一体なんの陰謀よ」

「その言葉で、私は一ヶ月前お互いの家に結婚の挨拶に行つたときのことを、遠い、とてつもなく遠い田で思い出していた。」

「それにしても、ほんとに書つてたとおりになつちやつたねえ。面白こつたらあじやしない」

「ほんとほんと」

向坂家、叶家、両方が海側の家に一堂に会した時のこと。

挨拶も済んだその後で、繰り広げられるのは私の母と海の母その人のお喋りだった。

意味ありげな二人の言葉に、私と海は当然顔を見合わせる。

「何? 言つてたとおりって、何のこと」

母に尋ねると、今年五十一になる彼女はからからと笑いながら言ったものだった。

「ああ、アンタたちが生まれたときねえ、私らせっかく同じ年に生まれたんだから、なんかセットになるような名前にしてしようとつてたんだよ」

続くのは海のお母さん。

「そうやう。それで、結婚とかしあやつたらかなり面白いなーって話してたんだけど」

『まさか本当に結婚するとは』

そこでハモッた二人は、大声をあげて笑った。

そう広くはない居間に、笑い声がこだまする。

なんか…いいんだけどね?

いいんだけど、なんかイラッとしてる。

「じ、自分たちで会前つけといて」

苦し紛れにそう漏らすと、すぐ横から肩をポンと叩かれた。

視線を上げると、そこは悟り切った笑顔で静かに首を横に振る海。

ああ そうだね、諦める。

…こんな感じで私達の結婚報告は終了していた。緊張感のかけらもない、むしろ井戸端会議的なアレですか結婚報告だった。

「…まあ。本当に陰謀があつたわけね」

「陰謀でこいつが、なんかもう……はあ」

知らず知らずにため息が出る。

「ちよっと、いつ来客あるか分かんないんだから辛氣臭い顔しないでよ。いーじゃない、結局はあんたたちの意志で一緒になつたんだから」

やつまつ杉浦先輩は、背筋をピンと伸ばして正面を見据えている。

…そういえば先輩はそういう相手、いないのかな。

疑問に思つたけれど、それを聞く勇氣は私にはなかつた。

「てかアンター！その首のキスマーチー！ては昨日もやつたわね！」

「や、やつたとか言わないでください…」これは、ただの虫刺されデス！」

「～～～かーーつ、なに見え透いた嘘を…ばれてものよつ」

…たしかに見え透いた嘘だ。だからって、はいそうですかと認められるわけがない。

私達が言ひ合ひをしてくると、一いつひに向かつて歩いてくる人影が見えた。

「ほり、先輩来客！」の話はおわり！

「上げるな卑怯者つ」

「来客あるかもしれないからちやんとじらつて言つたの、先輩じゃないですか！」

「～～～つ、命拾いしたわね、アンタ」

本当にその通りだ。

もとの姿勢に戻る杉原先輩を見ながら、私はそつと息をつくのだった。

「…なんかとつもなく疲れた。

会社から帰りアパートの前に着くと、部屋の電気はもうつっていた。

良い匂いもしている。

うーん…和風料理だな、きっと。

胸があつたかくなつて思わず頬がゆるんだ。

私は、帰ってきたときも「海がいて、部屋に灯りがともつているのを見るのがとてもなく好きだった。

それを日にした瞬間、ほつと肩から力が抜ける安心感と、幸福感。

にやける顔もそのままに、玄関の扉を開けると。

…そこには花をひとくんずほぐれずしている海がいた。

びつじよつ、見なかつたことにして口から出よつか。

一瞬、そんな考えが頭をよぎる。

突つ込むべきか、スルーすべきか。

逡巡していると、気配に気づいた海が居間の絨毯の上に寝転がつたまま、こちらを振り向いた。

「なんだおまえ帰つてたのか。頃くらこかけろよ」

「海があまりにも変態チックで、かけたくてもかけられなかつたんだよ」

「…そりや悪かつたな。だつて花さん可憐すがいで」

「はいはい、知つてる」

呆れつつも、私は家にあがる。

ソファーの横にドサツと荷物を置くと、とりあえず手洗いとうがいをしよひと台所に向かつた。

流しの前に立つて、袖を捲る。

「空ー」

「ん?」

「お帰り」

名前を呼ばれたかと思うと、唐突に、だけど凄く周りに馴染むうな声で海はそう告げた。

…私はそのまま手を洗つてうがいをすると、手指の水氣を切らないまま居間の床に転がる海の元へ行く。

「やつベー花やくまじやべー」

花さんと戯れる夢中な海は、気づいていない。

「海ー」

…名前を呼んで。

「なに…」うわっ

振り向いた瞬間海に向かって、切つていなかつた手指の水氣を思い切り飛ばしてやつた。

「冷たつ。いきなりなこすんだよ」

納得いかない、といつた表情の海。

対して、私は笑顔を返して口を開く。

いま、送り返さなきやいけないことに。

「ただいまっ」

…海は一瞬目を瞑つ。

それから、呆れたように笑つたのだった。

…これも、結婚したんだなつて実感できる瞬間のひとつだつたりする。

「早く着替えてこよ。飯できてるから」

「あーうん、なんか外まで良い匂いしてた。和風な匂い」
中身のない会話をしながら寝室へ向かうと、着替えを素早く終わらせる。

「わつわいえば海。花さんの恋人さ、結構頻繁に来てるよね

話ながら台所のテーブルについてた。

あっ、肉じゃが！和風な匂いこれだつたんだ。

テーブルの上に並べられた、まだ暖かいそれらの料理を眺めて、思わず目が輝いた。

「…そーですね」

「ひりやましいからひていじめないでよ?」

「…そーですね」

「あんたはいつからタモさんになつたの?」

「…そーですね」

「いやー、面定の場面じゃないから」

「そーですね…」

…埒があかない。

私は一度腰掛けた椅子から立ち上ると、未だ花さんから離れない海の元へいく。

「りあえず」飯一緒に食べよう、と声をかけると海は花さんを抱いて大人しく立ち上がった。

「俺…あの時は花さんも相手見つけただなって、…それしか感じなかつたんだけど」

床に花さんを降ろし、椅子を引きながら話す海。

傍らに立つ私を横目で、ゆっくり腰を下ろした。

「それっておまえのことで頭いっぱいだったからさ」

「

私は返すべき言葉を見失う。だってそんな台詞…なんて返していいか分かんない。

「…耳赤い」

「うへ、うるさいな」

「一体誰のせいだと思つてんのよー！」

体温が上がり、私はじまかすように海の向かいに腰を下ろした。

…なんかいつも私はかり焦つてる。

「どうかして海をドキドキせせられないだらうかと画策しながら、向かいでモグモグしている海を見やつた。

「…その表情は、やっぱり沈んでいる。

『気持ちちは分かるナビ…そこまでショックか？

何でいつかこの…気持ち的に花さんはもう自分だけのものじゃない、つていうナジめつけられるような出来事があると奥こんだらうナビなあ。

。 。 。

そこ今まで考えてから、私ははたと氣づいた。そつだ、

「結婚式やんのー。」

「…はつ？」

いきなり叫んだ私に、海がすりとんきょうな声を上げる。次いで、怪訝な顔になつた。

「…脳ミソ大丈夫？結婚式ならやつただろうが。おまえが泣きっぱなしだったとか情報いらぬから改めて言つない

「いやそうじやなくてね！？私達のことじやなくてーてか泣きっぱなしだったとか情報いらぬから改めて言つない

「照れない照れない」

「~~~~~、」

「あ、負けてる……！」

また悔しさを歯みしめながら、それでも私は言葉を続けた。

「花さんの……」

「え？」

「花さんの、結婚式。じよひ」

「……花さんの？」

「やべ、花さんの。」

「……なぜ」

「あなたが……こつまでもためだめしてゐるから。結婚式でもやればキツパリ諦めつくんじゃなこの。父親としてさー」

ほり、人間だつて結婚式して心にけじめつぐじょん。

「」飯を食べ進めながら言つと、海は数秒、黙つて考え込んでいた。

「くわえ箸のまま。

それを床から見上げていた花さんは、箸の揺れに大層興味をお示しになつて、即座に海の膝に飛び乗つた。

前脚を延ばして、べじべじとくわえていない方の箸の先を叩く。

かつ…可愛い…。

やつぱりどうしたって、シンデレより本能が勝つみたいだ。

されるがままだつた海は、それからぐにゃぐにゃに我に返る。

「…やつじゅうかな」

「ん?」

「花さんの結婚式。うふ、やつひつ」

そつと決まれば思ひ立つたが吉田一

高らかに宣言して、なんと今から執り行つつもりなのか、海は食べかけのご飯もそのままになぜか寝室に引つ込んだ。

その後手に取つて出てきたのは、真つ白なレースで作られた、何か。

「こずれ使つと想つて…作つてたんだよなあ…」

「…え…」

できれば…できれば聞きたくなかった言葉に私は耳を疑つ。

あの…まさかとは…まさかとは思つただけどね?それ…

「花さんのウエディングドレス」

だめだ』『眞性の馬鹿だ。

しかも聞けばこのウエディングドレス、『花さんと海のための』『レスだつたらしご。

…前々から分かってたよ? 海がどうしようもない花さんアタクド、しかも頭沸いちゃつてるつてことはな。

でもだからつて、まさかウエディングドレスまで作つりやつてるとは…!

「その器用さを他に生かそーよ…」

辟易しながら言つた私に、海は胸を張つて言つたものだった。

「生かしてるじやん。料理に」

「えーそれでは、これから花さんの結婚式を執り行いまーす」

うわっ軽い。そんな軽くていいの?

心中での突つ込みは口に出すことはなく。

私は玄関先でちまちまと行われている結婚式を見学していた。

『うやら海は同会と新婦の父親役を一人で両方やるらしー。

「うん。 もう好きになりました」という。

「新郎新婦入場～」

海が花さんと例のオス猫を抱き抱えて、自分の前にトントン。

ちなみに相手のオス猫は、えさで呼び寄せた。

「うわっ、花さん暴れるなつ、ドレスが破れつ

海の傑作はビリビリに粉碎された。

「そりゃそーなるわ……猫に服着せよくなんて無茶」

「おまえまでそんなこと言つのか空つ。花さんはなあ……つれつきとした人間なんだあつ」

「…あなたまだそんなこと言つたの?」

「俺は本氣だつ

精神科につれていくべきだらうかと、本氣で考えた。

「ゆつ、指輪の交換んん…。花さん、いつの間にかこんなに成長してええええ

さて、その後。

花さんの結婚式は滞りまく

主に泣きじゅぐる海のせい

ながら、ビリビリか段を進めた。

所要時間三十分。

私たちのなかで、花さんはお嫁にいつたことになった。

式が終わった直後、花さんは待つてましたとばかりに家を飛び出して、オス猫と仲良く姿を消した。

それを見てまたしつこく泣きわらつになつている海に、

新婚旅行じゃない？大丈夫、また帰つてくるって。

そう慰めの言葉をかけると、珍しく素直に、ああと頷いていた。

海も、短いながらも結婚式の中でとうあえずけじめはつけられたようだった。

その夜、ベッドに入ったあとで、海は唐突に呟く。

「考えてみたらさ」

「うふ？」

「俺、確かにいつの間にか花さん、彼女つていつよつ娘つていう感じになつてかも。オマエに父親として結婚式やねり、つて言われたとき、違和感なかつたから」

「…そつか」

「セリフ」

電気も消した暗闇に、沈黙が落ちる。

やつぱりなんだかんだ言つて、まだ落ち込んでるのかな。

そう思つた私は、慰めようと反対側を向いていの海のその背中に、布団の下で手のひらを当つた。

耳に聞こえるのは、衣擦れの音だけ。

「…海」

返事はない。

構わず私は、言葉を続ける。

「花さんも絶対、海のこと好きだから。海が花さんのことの大切に思つてるみたいに、花さんだって海のこと、ちゃんと大切に思つてるよ」

「……」

「そりや今日は家からでかけちゃつたけど。でも、2、3日すれば戻つてくれるよ。大丈夫、海の愛情はちゃんと伝わってる」

静かに言い終えて、それでも反応がない海に、今日はまだダメかと一つため息を落として、私は体の向きを戻そつとした。

戾そうとしたのだけれど。

その瞬間、両の手を少しきつめ、掴まれた。

海が体の向きを変えた支配がある。

「へ、」

超至近距離で海から自分と同じシャンプレーの匂いがすること、妙にゾクゾクした。

「本当に…本当にいいのか？」

声に力のない、だけど願いを込めるような海の聲音。

暗闇だからお互いの表情は見えないけれど。私はきっと自信を持つて言つ。

「恩い。だって、『花さん』だもん」

でしょ？

笑つてやると、こきなつきつめ抱きしめられた。

耳元で、さんざん、とかされた声がする。

返事代わりに、背中を叩いた。

「…といひで」

そのまま十秒は経った頃だらうか。

海は何の前触れもなく話を変えて、声にも元気が戻っていた。

「…なーっ。」

そのことこまつとしながらも、暗闇にも目が慣れたため、目の前の海が自分を見つめているのが分かった。

といつか逆にこんな距離じゃ分からぬだらう。

結婚して一ヶ月経っていても、変わらぬこのドキドキを、せつきり身体に感じる。

と、その時。

私の両手とこづか、指をまとめて握っていた海が、その手と一緒に一つと位置を上に動かし、肌がむき出しの私の手の甲に不意にしきつと口づけを落とした。

「！？」

予期せぬ行動に、言葉をつまりせる。

「なあ… 今日、いい？」

「い、いこつて… っ

いい、一体いつぞからスイッチ入ったわけ？

さつやまでの弱った海はひくせり、田の瀬にてむじにしつはせ、田
の光に強さが戻っていた。

少し潤んだ切れ長の瞳が、もともとある海の雰囲気に拍車をかけて
いる。

息が止まつねりだ。

「こつ、こまかーゆー話してなかつたよねえつ？」

必死の想いで言つたのに、海はひくこと返事をする。

「ああ、してないな」

「じやあなんじつ」

「 指？」

「はあつ？」

「俺、オマエの指に弱いんだ、多分。前に背中支えられたときも、
妙にぐくつときめて。さつきも背中、触つただろ」「ひだり

「そ、そりゃあ触つたけど」

「じゃ、仕方ないな。いつなつたのは俺の責任じゃない。オマエの
責任だ」

「なつ……」

なんて理不尽な言いがかりだ！

そう思いながらも、有無を言わせないこいつの雰囲気に、強いて言葉は口をつかない。

なまじ嫌じゃないから、否定もできないのだ。

いいよ、ともいやだ、とも言わない私に、海はだまつて額にキスをする。

「…」めん、寝るか

嫌だから返事をしないことでも思つたのだらうが、薄く笑つてもとの態勢に戻る。

「ちが…」

といつせん。

無意識にて、海のTシャツの袖をつかんでいた。

「ちがう、いやなんじゃなくて…むしろ嬉しいんだけど…ただあまりにも前触れがなかつたから…だから

「…嬉しいの？」

反対側を向いたまま、海はぼそつと囁く。

「そ、そりゃあ、海だから。嫌なはずないよ

「ほんとか？」

「ほんとー。」

「じゃあ、俺として気持ちいい？」

「なつ……。」

「でそんなこと聞くのよー？」

「早く」

「~~~~~、気持ちいいよー。どうでかなつそうだしつー怖いくらいでつ……」

「じゃあ、今日してもいい？」

「あたりまえっ……。」

「こまできて、私はやつと気づいた。

もしかして……はつ、はめられた！？

「あ、あんたねえ……。」

「楽勝。ありがとつぶ。オマエも気持ちいいみたいで良かった

振り返った奴は、清々しいほどの笑顔だった。

そうして、いまだ開いた口がふさがらない私に覆いかぶさる。

「ちゅう…」

「なに？ 悪いへりだつて？」

「た、たのしそうーむかつくー・

「あんたのスイッチって全然分かんないー」この変態ー・」

「誰が変態だ。俺のスイッチなんてなあ、オマエがそばにいればそれだけで常に入つてんだよ。覚えとけ馬鹿」

「…」

体温がかあっと上がる。

もひー、もひー、もひー……………

「とゆーわけで。…明日の仕事、せいぜい頑張れよ?…つらこだろ
うナビジナ」

海は妖艶に微笑えむ。

私は唇を噛みしめる。

あつと。

この先、私がここに勝てるなんて、そうそうないんだから。

私が海のこととを想つ限り、ずっと。

海と私の距離がゼロになる。

明日は杉原先輩に何て言い訳しよう、なんて考えながら、私は目を閉じるのだった。

番外編2 私達、結婚しました。（後書き）

人生のなかで一番ひまなのは大学生だって言つたのは一体ドコのどいつでしょ？（遠い田）。はい、というわけで二つ目の番外編でした。夏休みでようやく時間がとれまして。皆さんにお届けするのが遅くなってしまったことを、お詫びします。今回、長いですね。でも本編に入れたくても入れられなかつた小ネタをめいつぱい詰め込むことができて、作者本人としては楽しかつたです。この二人に關しては次から次へと話が浮かんでくるので、機会があればまた載せたいと思います。思い出したときにでもふらつと寄つて下さいありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8748g/>

俺の彼女はツンデレです

2010年10月9日23時14分発行